国王の奴隷少女たち

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
国王の奴隷少女たち

【Ｎコード】
Ｎ６５２５ＢＷ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
アラビア海の船旅で遭難したアメリカ人女子高生たちの想像を絶した受難。

（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

その出来事は、自分たちが乗っている船が遭難するとは、誰一人として予想もしていなかったアラビア海での平穏な観光クルーズから始まった。遊覧船はアメリカの名門女子高校によって貸し切られており、乗客のほとんどは、その学校の生徒たちだった。

深夜の、それも突然の沈没だったため、乗船者たち全員の生存は絶望視されたが、実際には六人の女子高生が溺死を免れ、なんとか岸辺まで泳ぎ着いていた。彼女たちは半死半生の状態で、海岸線を警備する王国軍の兵士たちによって発見された。

一旦は救助してもらえたことに感謝した女学生たちだったが、銃口を突きつける兵士たちによって王宮に連行され、強面の国王（サルタン）の前に引きだされたとき、遭難から助かった安堵感は言い知れぬ恐怖感へと変貌した。

「まだ年若い女性たちが命を長らえたのは何よりだ……。ようこそ、わが王国へ。異教徒の売春婦たち！」

石畳が敷きつめられた中庭で、横一列に並ばされた白人の少女たちを前にした国王（サルタン）が酷薄そうな笑みを浮かべて皮肉混じりに告げる。

「アメリカでは誰もが、おまえたちが、すでに死んでいると思っている。だから、誰も、おまえたちを助けには来ない。今や、おまえたちは、わしの奴隷だ。おまえたちも、それを自覚した方が身のためだ」

その途方もない言葉に、少女たちは恐怖で顔を引きつらせた。最年長のシンディーだけが抗議の叫び声をあげたが、国王（サルタン）から両頬に容赦ない平手を浴びせられ、すぐに沈黙した。

「襟ぐりの大きく開いた上着に丈の短いスカート、そして、華美なアクセサリー。さらには濃い化粧――まさに汚らわしい売春婦のような出で立ちだな。さあ、すべてを取り去って、素っ裸になってもらおうか」

国王（サルタン）が卑猥な笑みを浮かべながら、遭難者たちに対して屈辱的な命令を告げた。しかし、自分たちに向けて銃を構える兵士に囲まれている女子学生たちは、その不条理な言いつけに従うほかはなかっ

た。
　少女たちが脱いでいく衣服が石畳へ一枚一枚ずつ落ちていく様子を、国王（サルタン）は好色そうな眼差しで見つめていたが、全員が下着姿になったとき、ただ一人だけTバックを身につけているシンディーの姿を目にし、その少女らしからぬ下着に激しい怒りを覚えた。さらに彼女がそれを脱いだとき、陰毛を完全に剃毛していることを知った国王（サルタン）は、あまりにも慎みのない少女に対する怒りを抑えることができず、その顔を拳で殴りつけた。
「ふしだらな白人女は、どいつもこいつも似たりよったりで、本当にうんざりする。おまえたちは、破廉恥な姿を平気で人前に晒し、穢らわしい性欲にまみれている。——ということで、おまえたちから、その淫らな欲望を取り去ってやるから、ありがたく思うんだな」
　女子高生たちは、国王（サルタン）が何を語っているのか、まったく理解することができなっかたが、その言葉に含まれていた幾つかの単語に対して、おぼろげな不安を抱いた。
　国王（サルタン）が合図すると、数人の年老いた女性たちによって、呆然と立ち尽くす少女たちの前に六脚の丸椅子が運ばれてきた。さらに鋏や諸々のアイテムが入ったバッグも運ばれてくる。それらの様子を黙って見つめている不運な女子高生たちは、これから行われることに対して不安を募らせていた。
　老婆たちは、彼女たちを手荒く椅子へ座らせると、鋏を使って髪を切り始めた。そして、自分たちの頭上で電気剃刀が使われだしたのを感じた六人の少女たちは、一斉に、すすり泣きを漏らした。しかし、彼女たちの試練は、シェービングクリームが適用されて剃髪され、頭が完璧に滑らかななるまで続くこととなる。
　さらに、女子高生たちから眉毛が剃られ、特別な日焼けオイルが塗られて磨かれた禿頭が頭上の太陽からの照り返しで光り輝くようになると、国王（サルタン）は満足げに頷いた。そして、少女たちは、自分の前に鏡がもたらされ、毛髪のない光り輝く頭と眉毛のないエイリアンめいた顔を見せつけられたので、全員が嘆き悲しんだ。

「これからは、おまえたちに女性らしい美しさなどは無縁だ。今、おまえたちは頭が燃えるような痛みを感じているだろう。それは特殊なオイルによって、毛嚢が破壊されたからだ。要するに、おまえたちは全員、永久に禿げたままということだ」
　そう言って、国王（サルタン）が嘲笑する。
「上のカットが滞りなく終わったところで、次は下の方のカットだ」
　国王（サルタン）が再び口にした意味不明な台詞に対して、女学生たちは恐れを抱きながらも、兵士たちに追われるようにして、王宮内の一室へと連れいかれた。建物の中は廊下も含めて全体的に華美な装飾で覆われていたが、そこだけは実用本位なのか、床も壁も白いタイル貼りで、まるで手術室のようなところだった。
　そして、その部屋の真ん中には、瓶、注射器、外科用メス、外科用鋏、鉗子などの医療器具が整然と並べられているトレイを載せた小さな台とあぶみと革紐を備えた細長い台が置かれている。そして、その傍らには白衣を着た痩身の男が佇んでいた——いかにも医師という雰囲気を全身から醸しだしている。
　国王（サルタン）が一番先頭にいた少女を黙って指し示すと、彼女は二人の兵士によって、足をあぶみに置いて大きく広げた状態で、台上に革紐で結びつけられた。その女生徒は自分に鎮静剤を注射し終えた白衣の男性——医師がトレイから外科用メスを取り上げて、股間へと移動する様を恐怖におののく目で追っていた。
　医師は淫蕩な香りを放つクリームを左手の指先で掬い上げると、それを陰核に塗りこみ始めた。そして、その小さな肉芽が充血して大きく膨らむまでマッサージし続ける。羞恥心と恐怖心にもかかわらず、少女の体は生理的な反応を示し始めていた。そして、まさに彼女がクライマックスに達しようとした瞬間、医師はピンク色に輝く肉真珠を左手の指先で摘んで引っ張り上げると、その付け根を横切るように右手に持っていた外科用メスを走らせた。
　その直後、鮮血の噴水が真っ白な太腿の間で緩やかな弧を描く。同時に、股間から脳髄へと駆け上がる、まるで焼き串でも突き刺さ

れたかのような激痛に苛まれた少女は、獣じみた絶叫をはりあげた。そして、そのあまりにも堪えがたい苦痛によって、最初の犠牲者はたちまち失神してしまった。

　当然ながら、他の女子高生たちは、自分たちの仲間に残虐な割礼が施されたのを目の当たりにして、その衝撃から一斉に悲鳴をあげたが、医師は騒ぎ立てる白人少女たちを無視するように、血が吹き出している傷口を手術糸で丁寧に縫い合わせる作業に意識を集中させていた。

「騒ぎ立てるな」

　国王（サルタン）は大声で威嚇した。

「この処置は、おまえたちから肉欲を取り去り、淑やかな女性にするためのものだ。おまえたちが、わしを喜ばせるためだけに存在する奴隷として、これまでの人生を忘れ、新しい人生に適応するのにも役立つはずだ」

　その後、女子高生たちは一人ずつ割礼台に縛りつけられ、恐怖と苦痛の叫び声を上げさせられていく。医師は陰核を付け根から切り落とす前に、毎回、その快楽器官にクリームを塗り込みながらマッサージを施し、犠牲者たちに対して最後の性的な刺激を与えたが、決してオルガズムまで感じさせはしなかった。そして、五人の少女たちから陰核が切り落とされるのにかかった時間は、ほんの十数分だけだった。

　そして、一番最後に残されたシンディーのもとへ、国王（サルタン）がゆっくりと近づいてくる。これまで、とくに彼女へ辛く当たってきた酷薄な支配者の接近に対して、最年長の少女は無意識のうちに体を強ばらせていた。

「おまえが下の毛を剃り落としているのは、じつに好都合だ……」

　国王（サルタン）は不気味な微笑みを浮かべながら、シンディーの耳元で囁いた。

「淫乱なおまえには、それを根本的に治療するための外科手術を施すつもりなんだが、本来ならば、手術前にやらなければならない、

剃毛という処置を省かせてくれているのだからな……。ふふふっ、おまえへの割礼は、単に肉欲の芽は摘み取るのではなく、その根っこから全部を引き抜き、さらに淫蕩な花びらも切り取って、その花が二度と咲くことがないように堅く閉じ合わせてやるから、ありがたく思え」

シンディーは国王（サルタン）の好む修辞的な言葉の意味するところ——それが徹底的な陰核切除術と完全な陰門封鎖術であるということを正確に理解した。そして、それを為された自らの女性自身をリアルにイメージし、とてつもなく大きな衝撃を受けた。まさにバービー人形と同じような股間——もはや、それは女性の性器とは言い難いものだ。彼女は恐怖と絶望のあまりその意識を手放してしまった。

鼠蹊部に生じた鋭い痛みによって、強制的に目覚めさせられたシンディーは、革紐で割礼台に縛られている自分の足の間で、外科用メスと鉗子を手にした外科医が立っていることに気づいた。

シンディーは下級生たちのときと違い、陰核を勃起させるためのクリームを塗り込められてはいなかった。なぜなら、医師は、その処置を必要としなかったからだ。彼女が気絶している間に、陰核は自身を保護する覆いを綺麗に剥かれ、容易に“料理”できる状態へと晒けだされていたのだ。

「お願い！　切り取らないで！！」

陰核包皮を切除された疼痛に耐えながら、シンディーが必死な思いで懇願するが、期待に瞳を輝かせている国王（サルタン）は、医師に対して、その非情なる手術を継続するよう先を促す。

「やってくれ、先生（ドクター）」

主の命に黙って頷いた外科医は、剥き出しになっている陰核亀頭を鉗子でしっかりと挟み込むと、それを自分の方に向かって力一杯に引っぱり上げる。これまで一度として経験したことのない強烈な痛みに襲われたシンディーが部屋中に響きわたるような悲鳴を上げたが、医師はなんら斟酌することなく自分の職務に専念し続ける。

国王(サルタン)は限界まで引き伸ばされている肉芽の付け根へ無造作に突き立てられた外科用メスの鋭い切っ先がぐるりと環状に走り、器官の周りを体内奥深くまで切り進んでいく様を喜悦に満ちた目で見つめていた。もちろん、売春婦のような少女が発する絶叫をも耳にしながら、心を躍らせていた。

　外科医の手にする鉗子が引き上げられるにしたがって、真っ赤な鮮血にまみれた芋虫状の器官が少しずつ体外へと引っぱり出されてくる。最後には、それが二叉となって分岐し、二本の肉根が露出するところまで、完全に引き出されてしまう――その頃には、魂消る悲鳴をずっとあげ続けていたシンディーの声も嗄れてしまい、口からは絶え絶えの息が漏れるだけとなっていた。

　陰核器官のすべてを周囲の組織から十分に切り離したと納得した医師は、外科用メスを刃先の長い外科用鋏に持ち替えると、細長い切っ先を切開部の奥深くまで差し込んでいった。それから、慎重な手つきで、その鋏を二回にわたって素早く閉じ合わせる――その度に鈍い断裂音が室内で不気味に鳴り渡る。その光景に興奮する国王(サルタン)は、無意識のうちに自分の股間へ手を伸ばしていた。

　鋭敏な性感神経を内包する陰核脚を続けさまに切断されたシンディーは、あまりの激痛で目の前に無数の星が煌めき、脳内がまっ白に染まっていた。さらに、しっかりと固縛されていたにもかかわらず、割礼台の上で全身を大きく仰け反らせ、部屋の内外に断末魔の叫びを響きわたらせた。

　医師がすっと鉗子を持ち上げて、シンディーの目前にかざす――つい今し方まで彼女自身の一部であった細長い肉片が赤い血を滴らせながら揺れていた。一見、ピンク色をした芋虫のように見えるが、途中から二つに分岐している形状は、それとは異なる“もの„であることを如実に示していた。

　もはや、シンディーには性感神経の僅かな痕跡さえも残されてはいなかった。国王(サルタン)の意志に忠実な医師によって、陰核亀頭から陰核体、そして、恥骨へと繋がっていた陰核脚まで、快楽器官のすべて

を完全に摘出されてしまったのだ。
　それから、医師は陰核切除術の過程を凝視し続けていた国王（サルタン）の方に向き直ると、かつては白人少女の陰核を成していた肉片を彼の掌の上にそっと落とした。国王（サルタン）は、その触感を楽しむかのように、しばらくの間、芯のある柔肉を太い指先で捏ね回していたが、おもむろに、それをシンディーの頬に擦り付けると、満面の笑みを湛えて囁いた。
「光栄に思うんだな。これは、わしのコレクションの一つとして執務室に飾ってやることにしよう。——さあ、先生（ドクター）。手術を続けてくれ」
　医師は国王（サルタン）の言葉に黙って頷くと、手慣れたメス捌きで両方の小陰唇を素早く切り離す。さらに閉じ合わせる陰門が、傷口が治癒することによって完全に癒着するよう、両方の大陰唇の柔肉を半分ずつ切り取ったので、シンディーは堪えがたい苦痛から、再び、絶叫を張り上げた。
「心配しなくてもいいぞ、売春婦」
　性的な快楽に係わる陰核器官の一切合切を奪われ、絶望に打ちひしがれる少女の耳元で、
国王（サルタン）が意地の悪るそうな笑みを浮かべながら残酷に告げた。
「小便と生理のために、小さな穴は、ちゃんと残してやるからな」
　医師は、声を押し殺して泣き続けるシンディーの悲痛な思いなどお構いなしに、その幅を半分ほどに減じてしまった左右の大陰唇をぴたりとくっつけると、その合わせ目を黙々と縫い合わせていった。

　単純な陰核切除術を施されただけの、五人のアメリカ人少女は、国王（サルタン）との二度目の謁見が行われる前の日までに傷口が癒えていた。国王（サルタン）は自分の目の前で、完璧に滑らかな光り輝く頭を深々と下げてお辞儀をする、扇情的な薄衣をまとっただけの白人少女たちを微笑みながら見つめていた。
　女子高生たちは自分自身への性欲の絶頂期にあった十代の少女だ

ったが、彼によって強制的に割礼を施されたことにより、オルガズムを経験する能力を永遠に失って、今では性的に死んだも同然だった。

　下級生たちと合流するために、陰門封鎖されたシンディーが裸のままで、中庭へと連れてこられたとき、五人の少女は思わず息を呑んだ。陰核を切り取られた直後、別室へと連れていかれたため、上級生の身に加えられた残酷な処置について、彼女たちはまだ何も知らなかったが、素っ裸で歩かされている異様な姿を目撃させられて大きな不安を抱いたのだ。

「さあ、よく見ておくんだ」

　国王（サルタン）が宣言すると、二人の兵士がシンディーを両側から抱え上げ、太腿を大きく開かせた。彼女の陰裂があるべきはずの股間には赤く炎症を起こしている縫い合わされた傷跡が縦にまっすぐに走っているだけだった。それを目にした五人の不安げな表情は、一瞬にして恐怖のそれに取って代わった。

「よく見ておけ！　おまえらの誰であろうと、わしを背いたり、淫らな欲望に身を任せたりしたら、すべてを切り取って、こんなふうに閉じ合わせてやるからな！　そして、今後、おまえらに許される唯一の性的なものは、これだけだ！」

　国王（サルタン）がそう言うと、二人の兵士は陰門封鎖された股間を人前に晒らしていた女奴隷を床に下ろし、今度は四つん這いにさせた。その姿勢を無理矢理とらされたときに、シンディーは縫い合わされた傷口に激痛が走り抜けるのを感じて大きな悲鳴をあげた。そんな白人少女の後ろに跪いた国王（サルタン）は怒張した己の分身を取り出すと、未開の菊門をいきなり貫いた。

「きゃあーっ！」

　なんの受け入れ準備も為されていなかった括約筋が悲鳴を上げるように軋み、自らが出すものよりも太い肉柱によって強制的に広げられた肛門は、その皺が伸びきって今にも裂ける寸前だった。シンディーの悲痛な叫び声をバックミュージックにしながら、国王（サルタン）は己

の男根を窮屈な肉穴で激しく抽送し始めた。
「これこそが、おまえら西洋人の売春婦にふさわしいものだ！」
シンディーがアナルセックスによる恥辱と激痛から苦悶の呻きを上げた瞬間、国王（サルタン）自慢の肉棒は急に滑りがよくなった。裂けた肛門から溢れた鮮血が潤滑剤代わりになっているようだった。彼は、さらに勢いをつけて出し入れを繰り返して、自分の新たな奴隷となった白人少女に断続的な苦鳴をあげさせ続けた。
　他の少女たちは憧れの上級生が苦しむ姿に涙を零した。そして、国王（サルタン）の奴隷としての新しい人生に思いを巡らし、恐怖と諦めの気持ちに囚われていた。なぜならば、彼女たちには、もう逃れる術はなかったからだ。

（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作はボンデージ・ＳＭファンサイト„ＢＤＳＭ　Ｌｉｂｒａｒｙ　ー　Ｓｔｏｒｉｅｓ„と　去勢ファンタジーサイト„Ｔｈｅ　Ｅｕｎｕｃｈ　Ａｒｃｈｉｖｅ　ーＳｔｏｒｙ　Ｓｅｃｔｉｏｎ„（現在は閉鎖させています）の両方に投稿された　Ｈａｎｋ　氏による、„Ｓｌａｖｅｇｉｒｌｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｓｕｌｔａｎ„です。ただし、両方がまったく同じ内容ではなく、設定が微妙に変更されています。

先に投稿された„ＢＤＳＭ　Ｌｉｂｒａｒｙ　ー　Ｓｔｏｒｉｅｓ„では、割礼される少女たちは、アメリカン人の女子高生となっていますが、後で投稿された„Ｔｈｅ　Ｅｕｎｕｃｈ　Ａｒｃｈｉｖｅ　ー　Ｓｔｏｒｙ　Ｓｅｃｔｉｏｎ„では、題名に　（Ｒｅｖｉｓｅｄ　Ｖｅｒｓｉｏｎ）　＝『改訂版』という文言が追加され、割礼される少女たちも、フランス人の女子大生となっています。それ以外は、まったく同一です。

割礼される少女たちを、アメリカン人の女子高生からフランス人の女子大生に、わざわざ設定変更した理由は、はっきりとはしませんが、たぶん、アメリカとかフランスという国籍は関係なく、年齢的な問題なのではないかと思われます。女子高生と女子大生の違い――要するに、十八歳未満か十八歳以上かということではないでしょうか。日本では、児童ポルノで規制というと、実写動画か写真、あるいはコミックなどの絵という感じですが、欧米諸国では小説も、その規制対象に含まれる可能性があるのかもしれません。

今回、翻訳するにあたり、『改訂版』ではない方にしたのは、日本では、まだ小説が児童ポルノの規制対象になっておらず、やはり、割礼される女性が少しでも若い子の方が良いと思ったからです（笑）